公開日: 2018/07/05 (掲載号 : No.275)

〈小説〉『所得課税第三部門にて。』【第10話】「人生100年時代と賦課方式」

筆者: 八ッ尾　順一

カテゴリ:　読み物　　連載

〈小説〉

『所得課税第三部門にて。』

【第10話】

「人生100年時代と賦課方式」

公認会計士・税理士　**八ッ尾　順一**

「中尾統括官・・・賦課方式って・・・なんですか？」

浅田調査官は遠慮がちに中尾統括官に尋ねる。

昼休みで新聞を読んでいた中尾統括官は顔を上げる。

「年金制度の・・・賦課方式のことかい・・・？」

浅田調査官は頷く。

「ええ・・・実はこの本で、我が国の賦課方式について書かれていまして・・・この賦課方式は、将来、破綻するというのです・・・」

浅田調査官は手に持っていた『LIFE SHIFT（ライフ・シフト）－100年時代の人生戦略』（東洋経済新報社、2016年）という本を見せる。

中尾統括官は表題に興味を持ったらしく、本を手に取る。

「なかなか面白そうだな・・・著者は、イギリスのリンダ・グラットン（心理学者）とアンドリュー・スコット（経済学者）か・・・」

そう言いながら、ページをめくる。

「浅田君が言うのは・・・この箇所のこと？」

中尾統括官は、その箇所（69頁）を指す。

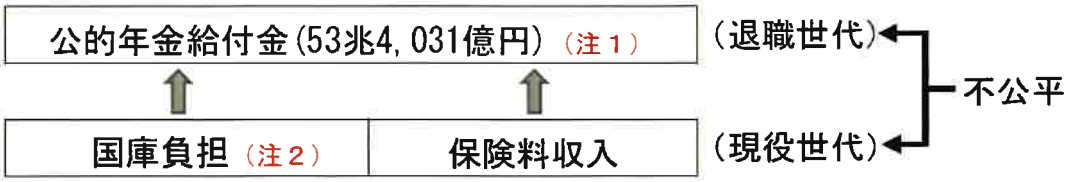
> ・・・賦課方式が直面しているのは、平均寿命が延び、そのうえ出生率も低下しているという問題だ。出生率が下がれば、勤労人口の増加、ペースが引退人口の増加ペースを下回る。その先に待っているのは、税収・保険料収入が減り、その一方で年金給付の支出が膨らむという事態だ。年金制度が変更されなければ、財政が立ちゆかなくなり、政府の債務が更に増大するだろう。平均寿命が長く、しかも出生率が大きく落ち込んでいる日本などでは、この問題がすでに切実になっている・・・

「ええ・・・」

浅田調査官は本を覗きながら頷く。

「なるほど、そういうことか。つまり賦課方式というのは・・・」

中尾統括官は、ペンを持って、罫紙に図を描く。



（注１） 公的年金給付金の内訳

（単位：億円）

合 計	国民年金	厚生年金保険	共済組合	福祉年金
534,031	213,040	255,993	64,994	3

（注２） 国庫負担は「基礎年金給付費」の２分の１

「つまり、毎年の保険料収入は、同時にその年の年金給付に充てられるということで、この図を見ればわかるように、年金給付を受ける人は退職世代で、一方、その年金等を負担するのが現役世代になっている・・・これが賦課方式だ。したがって、この賦課方式は・・・世代間で不公平が生じている・・・」
浅田調査官は中尾統括官の説明をじっと聞いている。

「・・・そうすると、高齢化が進むことによって、現役世代が支える年金受給者が増加し、現役世代の負担が増大することになるので、近い将来、賦課方式は破綻するであろうと考えられる・・・この本は、そういうことを我々に忠告しているわけだね。」
中尾統括官は本をペラペラめくりながら説明をする。

「・・・僕なんかあと２年で退職するから・・・年金制度は切実な問題だよ・・・」
中尾統括官はつぶやくように言う。

「そうですね・・・しかし、この調子だと、私たちの世代が退職するときには・・・間違いなく年金はもらえなくなる・・・ということですかね。」
浅田調査官は自嘲気味に言う。

「公務員は60歳で定年だけど・・・再雇用をしてもらって、まだ働かなければ・・・老後が心配だよ・・・」
中尾統括官は、真面目な顔になる。

「この本にも書いてあるけど・・・国連の推計によると、2050年までに、日本の100歳以上の人口は100万人を突破することになっている・・・今から32年後といえば、僕は90歳だ・・・しかし、そのときまで生きていれば、僕よりも年上の人は、少なくとも100万人以上いるということになるな・・・」
そう言うと、中尾統括官は苦笑する。

「・・・ところで、中尾統括官は、退職後、税理士になるのですか？」
浅田調査官が尋ねる。

「税理士？」
中尾統括官は、驚いたような表情になる。

「税理士になんて・・・なれないよ。」
中尾統括官は憮然という。

「でも、中尾統括官は、もう税理士の資格を取得しているのですから・・・当然、退職後は税理士になるのかと・・・」
浅田調査官は、中尾統括官の顔を見る。

「バカを言え・・・税理士になっても・・・損害賠償が怖いし・・・それに、クライアントを獲得する自信もないよ・・・」

中尾統括官は、自嘲の笑みをもらす。

「僕は定年で退職しても、とりあえず、再雇用で65歳まで税務署で働いて・・・その後は、どこか小さな会社の経理などをしながら、ほそぼそと生きていく・・・ということを考えているんだ・・・」

「そうなんですか・・・この本では、これからの若い人の、人生100年時代においては、85歳まで働かなければ、人生の終焉をむかえるまでに破綻してしまうと・・・警告しています・・・」
浅田調査官は腕を組んでため息をつく。

「暗い話だね・・・」
中尾統括官はそうつぶやきながら、『LIFE SHIFT』と大きく書かれた表紙を見つめた。

（つづく）

この物語はフィクションであり、登場する人物や団体等は、実在のものとは一切関係ありません。